

五
比
島
方
面
部
隊

-35-

0398

マニラ防衛司令部（威第一七六六一部隊）

年 月 日	略 歴
昭和一九一〇一六	軍令によりマニラ防衛司令部編成下令
一二一	編成完結（比島マニラ）
同日	第十四方面軍の隷下に入る
	編成要員の大部は南方諸地域からの後退患者中マニラ第十二陸軍病院等から治療の 為め退院した者であり当初は二百五十余名であつたが遂次第五七旅団編成要員等の 所謂南方総軍緊急補充要員、マニラ留守部隊現地召集者等を増加編入され十二月下 旬には約七百名となる。
二〇	爾後マニラ市サンタメサに位置しマニラ市及び其の周辺の防衛に任ず
一 上旬	マリキナ西側に移動軍及び兵団反撃作戦指導に任ず
三 中旬	モンタルバン東方三軒「ワ、」ダム附近に移動第一線部隊附近における作戦指導及 び戦斗参加
五 上旬	不動山に転進
六 下旬	光明山に転進
七 中旬	以後糧秣欠乏により自活自戦の態勢に移り持久を策したが栄養不良等に基く戦病死

昭和二〇

八 一五
九 二二

者統出し戦斗行動全く不能となる

停止戦

終戦

(注) 終戦後米軍の収容所に入ると同時に解隊せられ爾後各個に復員する

マニラ防衛、衛兵小隊（威第一七六六一部隊）

年月日	略	歴
昭和一九 七 二〇		マ防衛兵小隊編成完結（マニラ市） 独立歩兵第三五五大隊第四中隊第三小隊として編成完結（要員は第一〇二師団編成要員として昭一九・六・一四東部第一二・一三・六四部隊に応召同年七月三日門司港出帆七月一九日マニラに上陸）
一一 上旬		マニラ防衛司令官の直轄部隊となり衛兵小隊と改称 爾後マニラ市サンタメサに於て司令部の衛兵勤務に従事次でマニラ東北方三十軒リザール州「ワ、」附近山中に移動し衛兵勤務に従事
二〇 中旬		以後連日空襲
三 二五		八州山西麓に移動
五 中旬		不動山南麓に転進前任務を続行したが米軍の砲爆撃は熾烈の度を加へた
六 二七		司令部と共に光明山北麓に移動
七 一六		食糧欠乏の為司令部は各部毎に農園を配当して分散態勢に移行したが戦病者続出し戦斗行動全く不能となる
八 一五		停戦

昭和二〇 九 二 終 戦

(注) 終戦後米軍の収容所に入ると同時に解隊せられ爾後各個に復員する

年 月 日	略 歴
昭和一九一二年七月	マニラ防衛吉徳隊編成完結（マニラ市） 人員 隊長 少尉 吉徳 勇 以下四一名
同日	マニラ防衛司令官の隷下に入る 爾後マニラ市附近の防衛に任ず
二〇二二	米軍地上部隊マニラ周辺地区に進入之と交戦
二二二四	モンタルパン東方友軍陣地に到着
二二二五	マツキンレイに転進
二二二八	米軍の包囲攻撃を受け玉碎的損害蒙る
二二二九	脱出者はモンタルパン地区に到り臨歩第七大隊に編入されたが終戦までに全滅す
二二二九	終戦

1980

-41-

0403

マニラ防衛勤務中隊（威第一七六六一部隊）

年 月 日	略 歴
昭和一九二二年三月二日	マニラ防衛勤務中隊編成完結（マニラ市）
同日	マニラ防衛司令官の隷下に入る
二〇二二下旬	爾後「ワ、」ダム附近に派遣となり陣地構築、道路の開設、架橋作業等に従事
三三下旬	「ワ、」東方約六軒五〇一高地（八州山）南麓附近の陣地構築作業に従事
五五	八州山東方約六軒六二二高地（不動山）東麓に転進陣地構築に従事
六六	一部は糧秣蒐集のためモンタルバン附近に出撃 主力は司令部の直接警戒並に陣地構築に任ず
八八	全員糧秣蒐集作業に参加
九二	停戦 終戦 (注) 終戦後米軍の収容所に収容され爾後各個に復員する

マニラ防衛山上大隊	年 月 日	昭和一九二三年 〇〇〇〇〇〇 三二五五六六 中一 中上 中中 中下 旬四 旬四 旬四 旬四 七 八 九 上 一 二 旬 五 二 二〇
略歴		<p>マニラ防衛山上大隊編成完結（リザール州サンマテオ） 編成完結と共にマニラ防衛司令官の隷下に入り小林兵団中地区隊長の指揮下に在りてサンマテオ東側台の上に陣地を構築し同地の戦斗に参加</p> <p>マニラ地区侵入の米軍に対する反撃作戦並に五訓山附近の戦斗に参加</p> <p>モンタルバン東方約三軒千秋山附近の戦斗に参加</p> <p>不動山附近の戦斗に参加</p> <p>糧秣極度に欠乏し、戦死、戦病者続出し六月二十九日最後の攻撃を実施し残存者は僅か十数名となる</p> <p>以後自活、遊撃戦斗に移る</p> <p>停戦</p> <p>終戦</p> <p>(注) 1. 山上大尉以下約二〇〇名はあらびや丸遭難後救助され、19・10・20マニラに帰還第一四方面軍に転属其の際生死不明者約二五〇名も其の儘転属す</p> <p>2. 生存者は終戦後米軍に収容され爾後各個に復員する</p>

特設第一機関砲隊（威第一〇六一九部隊）

年 月 日	略 歴
昭和一九一〇一八	特設第一高射機関砲隊編成完結（小倉第八〇八八部隊）
一一〇二〇	門司港出帆
一一〇一〇	ルソン島マニラ上陸
一一〇一〇	編成改正により新たに要員を補充し、特設第一機関砲隊（隊長西河中尉以下一二七名）編成完結
一一〇一〇	マニラ市内同飛行場でマニラ高射砲隊司令官の指揮下マニラ在港船舶港灣施設飛行場等の掩護に任ず
一一〇一〇	マニラ東方拠点リザール州イボ第四一軍河島兵団上田防空長の指揮下優勢な米軍の攻撃を受け同年四月下旬隊長以下二十余名となる
一一〇一〇	イボ東方高地に転進斬込戦闘を続行したが五月十八日隊長以下全員玉砕す
一一〇一〇	停戦
一一〇一〇	終戦
一一〇一〇	（注）少数の生存者は終戦後米軍の収容所に収容され爾後各個に復員する

特設第二機関砲隊（威第一〇六一九部隊）

年	月	日	略	歴
昭和一九	一〇	一八	特設第二高射機関砲隊編成完結（小倉）	
	一〇	二〇	門司港出帆	
	一一	一〇	ルソン島マニラ上陸	
			編成改正により新に要員の補充を以つて特設第二機関砲隊（隊長武下中尉以下一七名）編成完結	
至自	二〇	二〇	マニラ市内同飛行場でマニラ高射砲隊司令官の指揮を受けマニラ在港船舶港灣施設飛行場等の掩護に任ず	
	二〇	二〇	マニラ東方拠点リザール州モンタルバン東側高地に展開して防空戦斗に参加	
	二	中旬	米軍の本格的攻撃を受け三月下旬火砲の大部は破壊され兵力は約六〇名の損害を蒙り四月以降は地上部隊となつて斬込戦斗を続行す	
	六		六月以降米軍の攻撃は更に猛烈を極め特に糧秣が欠乏して各隊は分散して食糧獲得のための斬込戦斗を続行したが隊長以下悉く戦死す	
	八	一五	停戦	
	九	二	終戦	
<p>（注）生存者は終戦後米軍の収容所に収容され爾後各個に復員する</p>				

0070

0407

特設第三機関砲隊（振武第一〇六一九部隊）

年	月	日	略	歴
昭和一九	一〇	一八	特設第三高射機関砲隊編成完結（小倉）	
	一〇	二〇	門司港出帆	
	一一	一〇	ルソン島マニラ上陸	
			編成改正により新に要員の補充を以つて特設第三機関砲隊（隊長田崎中尉以下二七名）編成完結	
			爾後マニラ高射砲隊司令官の指揮下に入りカロカン飛行場で対空戦斗に参加	
			米軍の爆撃を受け火砲は全部破壊さる	
			アンチポロに転進	
			ボンボン東方神力山附近に転進戦斗に参加約七〇％の損害を受く	
			御光山に転進戦斗参加	
			以降米軍の攻撃は更に熾烈を極め特に食糧欠乏し各隊分散食糧獲得のためナグラ湖東側に進出斬込作戦を続行したが隊長以下悉く戦死す	
			停戦	
			終戦	
			(注) 少数の生存者は終戦後米軍の收容所に收容され爾後各個に復員する	

独立有線第一二〇中隊（振武第一二五三五部隊）

年 月 日	略 歴
昭和一九 八 二五	独立有線第一二〇中隊編成完結（西部八一部隊、佐賀）
一一 一一	門司港出帆
一一 二二	比島リンガエン上陸
一一 二八	マニラ着
一一 上旬	第四一軍通信部隊としてマニラ東方拠点戦斗参加
一一 四	停戦
一一 五	終戦
一一 九	
一一 〇	
一一 〇	

（注）少数の生存者は終戦後米軍の収容所に入り爾後各個に復員する

0409

0409

<p>マニラ高射砲隊司令部（威第一〇六一九部隊）</p>	<p>年 月 日</p>
<p>略 歴</p>	<p>昭和一九 五 上旬 マニラ高射砲隊司令部編成完結（マニラ） 爾後第一四方面軍司令官の指揮下に入り、在港船舶、港湾施設並に飛行場掩護に任 ず 振武集団の隷下に入り、マニラ東方拠点アンチポロ附近に展開し防空戦闘に参加 兵器の大部破壊せられ以後地上部隊となり戦闘に参加 二〇 二 上旬 二〇 四 二〇 八 一五 九 二 終 戦 （注）生存者は終戦後米軍収容所に収容せられ爾後米軍により各個に復員す</p>

特設第六機関砲隊（威第一〇六一九部隊）

年 月 日	略 歴
昭和一九一〇一八	特設第六高射機関砲隊編成完結（小倉第八〇八八部隊）
一〇二〇	門司港出帆
一一一〇	マニラ上陸
至自 二〇一九 一一二	編成改正により新たに要員の補充を以つて特設第六機関砲隊（荒木中尉以下一七名）編成しマニラ高射砲司令官の指揮に入る
二二 上旬	マニラ市内飛行場の対空戦斗並にマニラ東港船舶、港灣施設等の掩護に任ず
二二 中旬	マニラ東方拠点リザール州モンタルバン東側高地に展開して防空戦斗に参加
六	米軍の本格的攻撃を受け同年三月下旬火砲の大部は破壊され兵力は約六〇%の損害を蒙り四月以降は地上部隊となつて斬込戦斗を続行す
八 一五	以降米軍の攻撃は更に猛烈を極め、殊に糧秣が欠乏して各隊分散食料獲得のための斬込作戦を続行したが隊長以下悉く戦死す
九 二	停戦 終戦 （注）少数の生存者は終戦後米軍の収容所に収容され爾後各個に復員する

特設第八機関砲隊（威第一〇六一九部隊）

年 月 日	略 歴
昭和一九 一〇 一八	特設第八高射機関砲隊編成完結（小倉）
一〇 二〇	門司港出帆
一一 一〇	ルソン島マニラ上陸
	編成改正により新たに要員の補充を以つて特設第八機関砲隊（青山少尉以下一二四名）編成完結
二〇 一 一五	爾後マニラ高射砲隊司令官の指揮に入りカロカン飛行場に於て防空戦斗に任ず
	第四航空軍司令官の指揮に入り北部ルソン島ソラノに転進、途中カバナツアン南方
	パバヤで米軍の爆撃を受け火砲は悉く破壊さる
	バヨンボンに到着し四月上旬迄同地附近の警備に任ず
一 下 旬	新に機関銃の交付を受け戦車第二師団長の指揮に入りヌエバロスカヤ州イムガン北
四 上 旬	側高地に陣地を占領して優勢な米軍と交戦
五 中 旬	部隊は多大の損害を受け以後遊撃戦斗に移行す
八 一 五	停戦
九 二	終戦

（注）生存者は米軍の収容所に収容され爾後各個に復員する

マニラ防衛輸送隊（威第四三八部隊）

年 月 日	略 歴
昭和一九二二〇	マニラ防衛輸送隊編成完結（マニラ）
二〇	爾後マニラ市サンタメサに位置し各部隊間の軍需品の輸送に任ず
一 中旬	「ワ、」、 「ダム」に位置し八州山陣地に軍需品の輸送に当る
五 中旬	以降兵団の糧秣収集作戦に参加、天神谷を拠点として放光山を経てレメヂオス附近の平地に斬込を実施し之れが収集に任じたが米軍の砲爆撃と悪疫等により戦死（戦病死）及行方不明等多数を生じた
六 上旬	道義山附近に進出し自活自戦の態勢に移る
八 一五	停戦
九 二	終戦
	（注）生存者は終戦後米軍に収容されると同時に解隊せられ爾後各個に復員す

1100

0413

中迫撃砲第四大隊（威第一〇〇五〇部隊）

年 月 日	略 歴
昭和一九 六 二 二	中迫撃砲第四大隊編成完結（京都中部四〇部隊）
七 一	屯営出發
七 一 二	門司港出帆
八 一	台湾基隆上陸
二 五	高雄港出帆
二 一 三	マニラ上陸
同 日	第一四方面軍に所属マニラ防衛司令官の隸下に入る
二 二 五	地区隊長の指揮に入り陣地構築に任ず
二 一 八	兵団反撃作戦に参加
二 〇	米軍地上部隊と交戦
五 下 旬	火砲悉く破壊せられ人員は約半数となる
五 二 六	放光山に向い転進
五 下 旬	放光山を拠点として兵団糧秣作戦に参加
七 下 旬	以降自活自戦の態勢に移る

自
至

二〇
二〇

昭和二〇

九 八
六 一五

停 戦

モンタルバンにおいて米軍に投降

(注) 終戦後米軍収容所に入り爾後各個に復員する

中迫撃砲第五大隊（威第一八八〇八部隊）

年	月	日	略	歴
昭和一九	七	一九	中迫撃砲第五中隊編成下令	
	七	二三	編成完結（沼田、東部第四一部隊）	
	同	日	屯営出発	
	八	二	門司港出帆	
	八	一二	沖繩本島那覇上陸	
	八	一三	那覇市附近の陣地構築及警備に任ず	
	一一	二〇	那覇出発	
	一一	二一	比島マニラ上陸	
	一二	一〇	第一四方面軍所属マニラ防衛司令官の隷下に入る	
	同	日	阿部大隊長の指揮に入り陣地構築に任ず	
	一二	中旬	米軍の爆撃を受く	
	二〇	一	地上部隊の攻撃を受け連日激戦を展開す	
	二	四	四〇〇高地に転進	
	三	中旬	万古山に転進約一ヶ月間地区隊の戦斗に協力	
	四	下旬		

六 上旬
六 下旬
八一五

六合山に陣地を占領して戦斗を継続す
正真山附近に進出食糧不足のため自活自戦の態勢に入る

停戦

(注) 生存者は終戦後米軍に収容され爾後各個に復員する

マニラ防衛通信隊（威第三一〇五部隊）

年 月 日	略 歴
昭和一九一二年 中旬	マニラ防衛通信隊編成完結（マニラ市） 爾後マニラ市サンタメサに位置し通信連絡業務に任ず
二〇 一 中旬	モンタルパン東方千秋山に移動通信連絡に任ず
二〇 六 下旬	爾後司令部の移動に伴い遂次後方に転進す モンタルパン東方一八軒七五高地に転進したが糧秣極度に欠乏し、戦死、戦病死者等多数を生ず
二〇 七 中旬	道義山に進出し部隊主力は其後同地を基地として遊撃戦を継続しノバリチェス附近に対し糧秣収集の為め斬込を実施した
八 二	米比軍の急襲的攻撃を受け多数の損害を生じた
八 一五	停 戦
九 二	終 戦

（注）生存者は終戦後米軍の収容所に入り爾後各個に復員する

臨時自動車第一中隊（威第三九〇部隊）

年 月 日	略 歴
昭和一九一一年 同日	臨時自動車第一中隊編成下令 編成完結（マニラ） 中隊長 中尉 当 金 多喜蔵 以下一三〇名 マニラ防衛司令官の隷下に入る
同日	爾後マニラ市サンタメサに位置しアンチポロ、モンタルベンに対する軍需品の輸送、メイカアヤン、イムス附近から微発米の運搬に任じた。
二〇 一 中旬	モンタルベンに移動し前任務を続行す
二 一 一 中旬	マニラ東方「ワ」に転進したが自動車の行動は全く不能になり、爾後臂力により「ワ」からリザール州八州山の基地への軍需品の輸送に任じた
三 中旬	八州山に移動し不動山基地への軍需品の輸送に任じた
五 上旬	不動山に移動し兵団の糧秣作戦に参加した
六 下旬	放光山に移動し七月下旬まで同地で自活態勢を整え遊撃戦を実施した
七 下旬	ラコタン山附近に移動しノバリチエス附近に対し斬込を実施しつゝ自活中終戦となる
九 二	終戦

（注）生存者は米軍の収容所に収容され爾後各個に復員す

臨時野戦補充隊（威第三五〇部隊）

年 月 日	略 歴
昭和一九三一年 一九三一年 二〇二三年 自二〇二一年 至二〇一九年 二〇一九年 二〇一九年	臨時野戦補充隊編成完結（マニラ市） 要員は南方諸地域よりマニラ第十二陸軍病院に後送された患者中治療退院者 隊長 中尉 横山 元次郎 人員 隊長以下二四八名 比島の戦況急迫に伴いマニラ防衛司令部に配属せられマニラ北部地区の警備並に戦 斗準備を命ぜられカロカン附近に陣地を占領した 米軍地上部隊進攻し来り全力を以つて抗戦したが衆寡敵せず戦斗一日にして陣地は 奪取せられ約六〇名の戦死傷者行衛不明者を生じた 爾後残留者は概ね二隊に別れマニラ東方拠点に後退し各々友軍に收容さる レメデオス附近の警備に任ず 爾後武天山附近に転進して遊撃戦闘を実施した 終戦 （注）生存者は終戦後米軍の收容所に收容され爾後各個に復員す

臨時工兵第二中隊（威第三九八部隊）

年 月 日	略 歴
昭和一九 七 二四	南方総軍第一次緊急要員臨時召集（西部第二二二部隊に於て）
八 一七	門司港出帆
九 二一	比島サンフェルナンド上陸
一一 上旬	マニラ着
一二 一〇	臨時工兵第二中隊編成完結（マニラ）
一一 一〇	中隊長 中尉 中島 学
一一 一〇	編成人員 中隊長以下二一五名
一一 一〇	マニラ東北方約三十軒モンタルバン地区に転進を開始し爾後同地区に陣地構築道路開設等に從事、又一部を以つて兵団反撃作戦に参加せしむ
二〇 三 下旬	以降連日の激戦が展開さる
六 中旬	八州山不動山の戦斗に於て連日の激戦と食糧不足のため死傷者続出せり
六 中旬	臨工第一中隊と合体し小林兵団工兵隊と改称せられ爾来主として自隊のため糧秣を収集しつゝ遊撃戦斗を実施し終戦に至る
九 二	終戦
（注）少数の生存者は終戦後米軍の収容所に収容せられ爾後各個に復員す	

特設第十機関砲隊（威第一五四〇三部隊）

年 月 日	略 歴
昭和一九 一 一九 一 三 自 二〇九 至	<p>特設第十機関砲隊編成完結（市川市）</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 三ヶ小隊編成 砲十二門 2. 中隊長 少尉 渡辺 信雄 <p>門司港出帆 マニラ上陸</p> <p>第一四方面司令官の隷下に入る</p> <p>同年九月迄マニラ競馬場附近に待機し教育実施</p> <p>リザール州モンタルバン東方八軒五〇一高地（八州山）に転進しマニラ防衛司令官の指揮に入り直ちに陣地を構築し五月下旬迄同地で戦闘した</p> <p>中隊長は五月中旬、兵十数名を率い糧秣収集のため放光山方面に出動し其後消息を絶つた。残留者は五月下旬迄同地で戦闘を継続したが、米軍の進出に伴い巖山附近に後退するの止むなきに至つた</p> <p>当時既に火砲は悉く破壊され且つ糧秣は皆無であつたので爾後中隊は同地附近で自活態勢を整え遊撃戦闘に移行したが犠牲者は続出し又多数の生死不明者を生じた</p>

昭和二〇 九 二 終 戦

(注) 生存者は終戦後米軍の収容所に収容され爾後各個に復員する

年 月 日	略 歴
昭和一九 一九 八	カブール沿岸砲兵隊編成完結（台湾） ルソン島に上陸 第一〇五師団長の指揮に入る マニラ出発 カブール島に上陸 振武集団直轄部隊となり同島の警備に任ず 米軍同島に上陸 同隊は之れと善戦したるも三月上旬多数の戦死者を出し火砲の大部は破壊され同島の沿岸は悉く米軍の占領するところとなつた 同隊は食糧欠乏したるため各分隊毎に分散しカブール西側高地を拠点として斬込戦 斗を続行す
二〇 二〇 一	カブール沿岸砲兵隊編成完結（台湾） ルソン島に上陸 第一〇五師団長の指揮に入る マニラ出発 カブール島に上陸 振武集団直轄部隊となり同島の警備に任ず 米軍同島に上陸 同隊は之れと善戦したるも三月上旬多数の戦死者を出し火砲の大部は破壊され同島の沿岸は悉く米軍の占領するところとなつた 同隊は食糧欠乏したるため各分隊毎に分散しカブール西側高地を拠点として斬込戦 斗を続行す
二〇 二〇 二	カブール沿岸砲兵隊編成完結（台湾） ルソン島に上陸 第一〇五師団長の指揮に入る マニラ出発 カブール島に上陸 振武集団直轄部隊となり同島の警備に任ず 米軍同島に上陸 同隊は之れと善戦したるも三月上旬多数の戦死者を出し火砲の大部は破壊され同島の沿岸は悉く米軍の占領するところとなつた 同隊は食糧欠乏したるため各分隊毎に分散しカブール西側高地を拠点として斬込戦 斗を続行す
二〇 二〇 三	カブール沿岸砲兵隊編成完結（台湾） ルソン島に上陸 第一〇五師団長の指揮に入る マニラ出発 カブール島に上陸 振武集団直轄部隊となり同島の警備に任ず 米軍同島に上陸 同隊は之れと善戦したるも三月上旬多数の戦死者を出し火砲の大部は破壊され同島の沿岸は悉く米軍の占領するところとなつた 同隊は食糧欠乏したるため各分隊毎に分散しカブール西側高地を拠点として斬込戦 斗を続行す
二〇 二〇 八	カブール沿岸砲兵隊編成完結（台湾） ルソン島に上陸 第一〇五師団長の指揮に入る マニラ出発 カブール島に上陸 振武集団直轄部隊となり同島の警備に任ず 米軍同島に上陸 同隊は之れと善戦したるも三月上旬多数の戦死者を出し火砲の大部は破壊され同島の沿岸は悉く米軍の占領するところとなつた 同隊は食糧欠乏したるため各分隊毎に分散しカブール西側高地を拠点として斬込戦 斗を続行す
二〇 二〇 九	カブール沿岸砲兵隊編成完結（台湾） ルソン島に上陸 第一〇五師団長の指揮に入る マニラ出発 カブール島に上陸 振武集団直轄部隊となり同島の警備に任ず 米軍同島に上陸 同隊は之れと善戦したるも三月上旬多数の戦死者を出し火砲の大部は破壊され同島の沿岸は悉く米軍の占領するところとなつた 同隊は食糧欠乏したるため各分隊毎に分散しカブール西側高地を拠点として斬込戦 斗を続行す

カブール沿岸砲兵隊

略歴

野戦高射砲第七八大隊（威第一二五一九部隊）

年 月 日	略 歴
昭和一九 六 六 八	軍令により野戦高射砲第七八大隊編成下令 編成完結（小倉、西部第八〇六二部隊）
六 一 一	門司港出帆
六 二 四	ルソン島マニラ上陸
二〇 一 二〇	爾後同地附近の防空戦斗に参加
一 一 〇	リガール州イボ附近に転進同地周辺の戦斗に参加
三 一 〇	アンチポロ、ボンボンに転進対空並に地上戦斗に参加
五	御光山、神力山、光輝山附近の戦斗参加
七	自活自戦のため遊撃隊を編成ラグナ湖東側に転進斬込戦斗を実施せり
八 一 五	停戦
九 二	終戦

（注）生存者は終戦後米軍の収容所に収容され爾後各個に復員する

野砲兵第五三連隊第三大隊（威第一〇〇七〇部隊）

年 月 日	略 歴
昭和一九一一年 一一二	野砲兵第五三連隊第三大隊編成完結（京都）
八二二	大隊長 少佐 川北松男
九二二	宇品港出帆
一一〇	パリントン海峡で本部、第六中隊の一部第八中隊の一部段列の便乗した瑞穂丸が海没して板杉中尉以下十数名戦死した
一一一	マニラに上陸
一一二	マニラ南方ラグナ州マウバン、サンバロック、ルックバン附近の警備
一一三	マニラ東方拠点アンチポロ、テレサ、バンタイ附近の戦斗に参加
一一四	第九中隊（和田隊）は勳兵团砲兵隊に配属、北ルソンに転進した
一一五	部隊は一般歩兵部隊となり第一線各隊と共に陣前斬込戦斗を続行す
一一六	以降僅少の生存者は最寄の部隊生存者とともにマニラ東方四〇軒レイハン、サンタマリア附近の戦斗に参加終戦となる
一一八	終戦
一一九	停戦
一二〇	終戦

（注）少数の生存者は終戦後米軍の収容所に収容され爾後各個に復員する

至自 至自 至自 〇 〇〇〇〇〇九 〇 〇〇〇〇〇九		昭和 一九	年 月 日	第八師団第二野戦病院（杉第四七九二部隊）
九 八 七 四 三 三 三 二 〇 〇 二 一 五 初 旬 一 二 〇 〇 一	八 七 二 三	八 七 二 三	八 七 二 三	
終 戦 停 戦 東海岸に到着 バナハオ山に転進開始 マルボンユに於て病院開設 サンタクララに於て病院開設 南部ルソン島リバ附近に於て病院開設 ルソン島北サンフェルナンド上陸 博多港出帆 第八師団第二野戦病院編成完結（弘前）		略 歴		

（注）生存者は終戦後米軍収容所に収容され爾後各個に復員する

仮編第九機関砲隊

年 月 日	略 歴
昭和一九一〇一七	仮編第九機関砲隊編成完結(舞鶴)
一九一〇二二	1. 隊長 中尉 今井 高次郎
一九一〇三〇	2. 人員 約一〇〇名(編成時三六名)
一九一〇三〇	3. 補充 約六〇名(宇都宮師団区差出緊急補充要員)
一九一〇三〇	4. 装備 機関砲十二門(二小队編成)
一九一〇三〇	一小隊門司港出帆
一九一〇三〇	一小隊宇品港出帆
一九一〇三〇	マニラ港上陸(一小隊十二月一日上陸)
一九一〇三〇	マニラ防衛司令官の隷下に属し第十一航空司令官の指揮下に入る
一九一〇三〇	マニラ東飛行場に陣地を占領し同地の防空に任ず
一九一〇三〇	モンタルパン東方芙蓉山陣地を占領し防空戦に参加
一九一〇三〇	万古山に転進この頃より食糧の欠乏極度に達し栄養失調症続出す
一九一〇三〇	不動山に陣地を占領し戦いを継続するも戦いは苛烈を極め多数の死傷者を生ず
一九一〇三〇	停戦

九
二
終
戦

(注) 少数の生存者は終戦後米軍の収容所に収容され爾後各個に復員す

00.00

-67-

0429

仮編第十機関砲隊

年月日	略歴
昭和一九一〇一七	仮編第十機関砲隊編成完結(舞鶴)
一〇三〇	1. 隊長 少尉 菅沼孝二
一二一	2. 人員 約一〇〇名(編成時三六名)
一二一	3. 補充 約六〇名(仙台師管区緊急補充員及東高集緊急補充員)
一二一	宇品港出帆
一二一	マニラ上陸
一二一	マニラ高射砲隊司令官の隷下に入りマニラ東飛行場に陣地を占領し十二月下旬迄同地の防空に任じた
一二二	北飛行場に移駐し同地の防空に任ず
二〇二	マリキナ東方三籽烈火山に転進戦斗に参加
二〇二	八州山に陣地を占領し戦斗を継続したが連日の激戦と食糧欠乏のため損害続出した
二〇二	巖山に転進し遊撃戦闘を継続す
八一五	停戦
九二二	終戦

(注) 少数の生存者は終戦後米軍の収容所に収容せられ爾後各個に復員す

仮編第十三機関砲隊

年月日	略歴
昭和一九一〇一七	仮編第十三機関砲隊編成完結(舞鶴)
一〇一九	舞鶴出発
一〇三〇	宇品港出帆
一一三〇	高雄港寄港
一二三	高雄出発
一二四	北部ルソン島バサン湾に避難航行中バシ―海峡において米潜水艦により沈没のため翌五日に及び救助作業が行われたが仮編第十三機関砲隊で救助されたのは隊長中尾少尉と上等兵塩谷利輝のみであつた
一二五	救助された隊長中尾少尉は其の後第四航空軍司令部副官附として比島作戦に参加し復員
二〇四一八	塩谷上等兵はヌエバビスカヤ州サラクサク峠において戦死す
二〇九二	右以外は全員19・12・5海没の際戦死と認定さる
	終戦

仮編第十四機関砲隊

年 月 日	略 歴
昭和一九一〇一七	仮編第十四機関砲隊編成完結(舞鶴)
	1. 隸属 マニラ防衛司令官
	2. 隊長 陸軍少尉 広瀬正一
	3. 人員 約一二〇名
	4. 改編 昭一九・一二下旬仙台師管区より緊急補充員約三〇名、東部第三七部隊よりの緊急補充員三三名の補充を受けて改編す
一九一〇三〇	宇品港出帆
一一三	門司港出帆
一一三	マニラ港上陸
一九一二	マリキナ飛行場の警備に任ず
二〇一五	マリキナ東方三軒千秋山に於て防空に任ず
三	八州山に転進防空に任じたが四月中旬には砲爆撃を受け火砲全部を破壊されたので改編し一般地上戦斗に参加した
五	不動山西側附近に陣地を占領し連日激戦を継続し死傷者続出、六月中旬には残存者

	<p>六 下旬 八 一五 九 二</p>
	<p>十 数名となる、隊長広瀬少尉は六月十二日桜花山で戦死す 放光山に撤退し自活態勢を整え遊撃戦を実施す</p> <p>終 戦 終 戦</p> <p>(注) 少数の生存者は終戦後米軍の収容所に収容され爾後各個に復員す</p>

仮編第十五機関砲隊

年 月 日	略 歴
昭和一九一〇一七	仮編第十五機関砲隊編成完結（舞鶴）
一〇一七	1. 隷属 マニラ防衛司令官
一〇三〇	2. 隊長 陸軍中尉 前田 誠
一〇一七	3. 人員 三十五名
一〇三〇	4. 装備 高射機関砲六門
一〇一七	屯営出発
一〇三〇	字品港出帆
一一一	マニラ港上陸
一一二 上旬	第十一航空地区司令官の指揮に入り北飛行場の防空に任ず
一一二 下旬	マリキナ飛行場の防空に任ず
一一〇 下旬	烈火山附近の戦闘に参加す
一一一 中旬	八州山に陣地を占領し防空戦闘に任じたるも連日の激戦にて火砲全部を破壊せられ
一一二 中旬	五月上旬改編して一般地上戦闘に参加す
一一三 下旬	不動山の戦闘に参加したが連日の激戦と食糧不足のため損耗甚大となり遂に遂に放

	<p>六 中旬</p> <p>八 一五</p> <p>九 二</p>
<p>昭和二十一年八月二日</p> <p>光山に転進す</p> <p>放光山附近に於て自活態勢を整え遊撃战斗中八月二日砲爆撃を伴う米比軍の急襲的攻撃を受け其の後全く消息を絶つに至る</p> <p>終 戦</p> <p>(注) 復員者なし</p>	

独立混成第二六連隊（威第一二九三六部隊）

昭和一九	年月日	略歴
八三	八三	独立混成第二六連隊編成完結（満州国チチハル市）
八一	八一	チチハル出発
八二	八二	朝鮮釜山港出帆
九八	九八	主力ルソン島北サンフェルナンド上陸第三中隊其他マニラ上陸
一〇〇	一〇〇	リンガエン湾に集結同地附近の警備並に陣地構築等に任ず
一〇一	一〇一	マニラに集結第八師団長の指揮に入る
一一一	一一一	ルソン島マドノグに転進、勤兵団長の指揮に入りサンベルナルジー海峡防衛に任ず
一二一	一二一	連隊主力は振武集団長の指揮に入りマドノグ出発北上す
二一七	二一七	ルソン島、カプール、サマール島に於いて捷一号作戦準備並に捷一号作戦に参加
二二四	二二四	停戦
二二五	二二五	終戦
二二八	二二八	
二二九	二二九	
三〇〇	三〇〇	

（注）生存者は終戦後米軍の収容所に収容され爾後各個に復員する

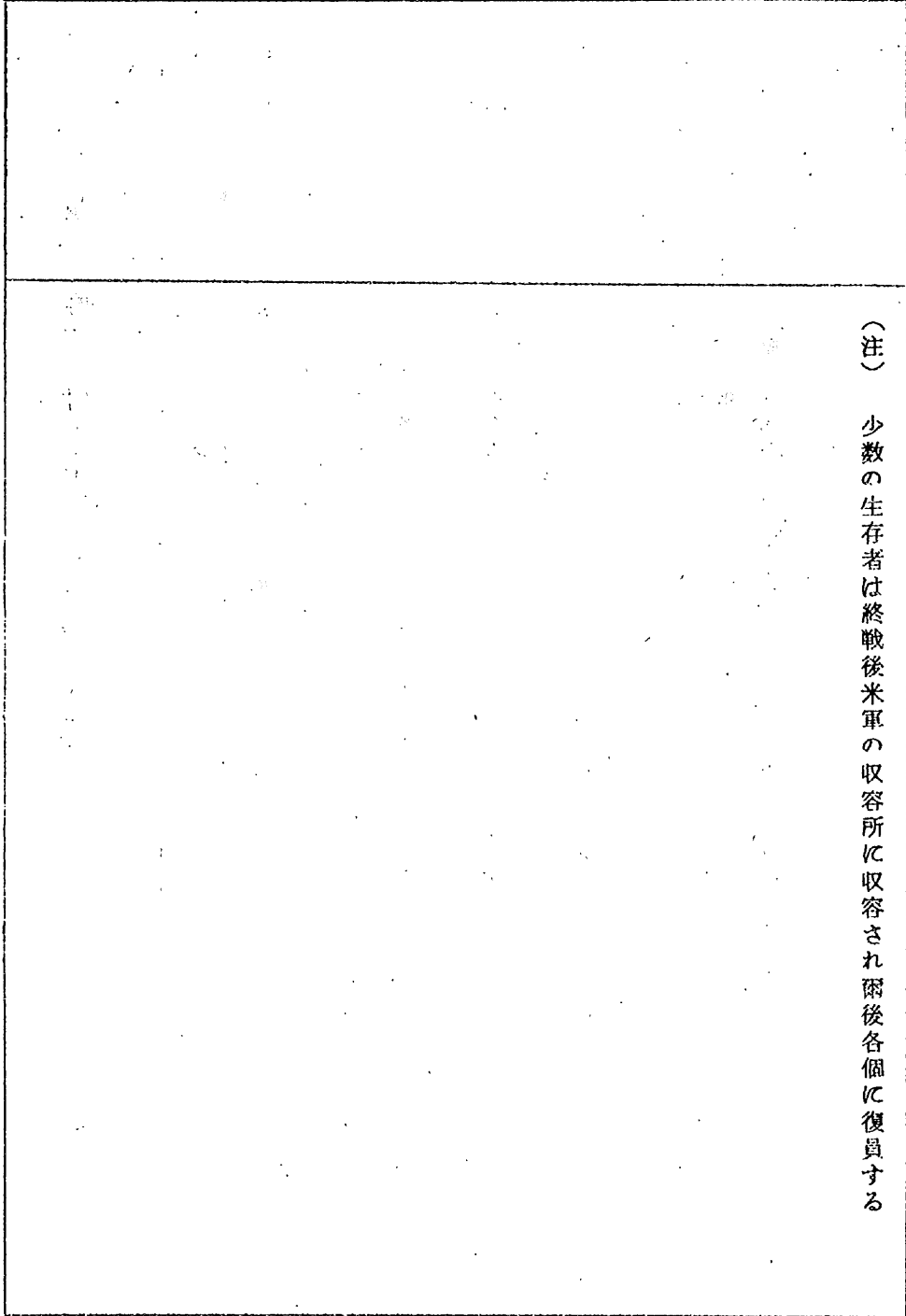
<p style="text-align: center;">岩 下 大 隊</p>	<p>年 月 日</p>	<p>昭和一九一一二 一 上旬</p> <p>二 〇〇 三二 下旬</p> <p>三 四 上旬</p> <p>八 一五 終戦</p> <p>九 二 終戦</p>
<p>略 歴</p>		<p>岩下大隊編成完結（リザール州アンチポロ） 大隊長 少佐 岩下 彌之助 爾後ニラ防衛司令官の指揮に入りマニラ東方拠点アンチポロに於て陣地構築に任 ず 野口兵団黒宮支隊長の指揮下に入る アンチポロ西北方地区の戦斗に参加、優勢なる米軍の攻撃を受け玉碎的損害をうく 残存者は福井大隊長の指揮を受け東方山地の線に後退し遊撃戦斗を続行し殆んど全 員戦死す 停戦 終戦 （注）少数の生存者は米軍の収容所に収容され爾後各個に復員する</p>

<p>吉川大隊</p>	<p>年月日</p>	<p>昭和一九二二 二〇 一 初旬 三 上旬 五 一六</p>
<p>略歴</p>	<p>吉川大隊編成完結（マニラ市） 部隊長 大尉 吉川 政憲 編成要員 1. ビルマ派遣騎兵第四十九連隊吉川中隊のマニラ残留者約一〇〇名（あらびや丸、神国丸海没生存者） 2. 南方諸域渡送マニラ滞留者（南方第十二陸精主体）約三〇〇余名 爾後マニラ南方ノバリチユス附近で作戦準備に任ず 河島兵団長の指揮に入りマニラ東方拠点イボ陣地第一線守備隊として戦斗に参加 米軍の攻撃本格化し部隊は陣地に拠つて奮戦したが戦況は遂次不利となり多数の損害を出した イボ東方山中に集結し次いで回山中を北上して5月下旬アツクレイに転進した 爾後大隊は組織的戦斗が不可能になつたので附近に陣地を占領し遊撃戦斗に入り後方擾乱斬込戦斗を続行した 此の間米軍の空陸からする絶えざる攻撃裡食糧欠乏し悪疫が流行し7月中旬大隊長</p>	

	<p>八 一 五</p>
	<p>九 二</p> <p>以下悉く戦(傷病)死す</p> <p>停戦</p> <p>終戦</p> <p>(注) 少数の生存者は米軍の収容所に収容され爾後各個に復員する</p>

阿部大隊

年月日	略歴
昭和一九 八 一〇	南方総軍緊急補充要員として臨時召集（東部第五十七部隊及東部第十六部隊） 門司港出帆
九 一一	
一〇 一三	ルソン島マニラ上陸
一〇 一五	阿部大隊編成完結（マニラ） 部隊長 大尉 阿部三郎
一〇 一五	マニラ防衛司令官の隷下に入り各一部をマツキンレイ、及びイムス附近に主力を以つてハゴノイ附近に陣地を占領し作戦を準備す
二〇 二四	米軍ナスグブに上陸、前進部隊の第二中隊之と交戦多数の損害を受けマツキンレイ陣地に後退す
二 二八	再度ハゴノイに後退大隊主力と共に戦闘す
二 二二	大隊主力は斬込作戦を決定しその大部は玉砕す
八 一五	僅少なる残存者は其の後附近山中にて遊撃戦に入る
九 二二	停戦 終戦



(注) 少数の生存者は終戦後米軍の収容所に収容され爾後各個に復員する

第一野戦補充隊司令部（マニラ補充司令部）

年 月 日	略 歴
昭和一九一七 一九一一 一	第一野戦補充隊司令部編成完結（マニラ） マニラ防衛司令官の隷下に入る 爾後マニラ市に在りてルソン地区滞留者（内地よりの補充員、退院者、軍人、軍属等）を任務に基き各々其の目的地に追及輸送せしめ且つ戦力の充実を計ることに任ず 二〇 一 上旬 戦斗任務を帯びモンタルバン東方山中に陣地を占領す 二 下旬 米軍地上部隊の攻撃を受け交戦に入る 六 上旬 戦斗の進捗に伴い不動山に後退したが同月下旬米軍の後退により再び万古山に進出し同所で終戦を迎えた 八 一五 停 戦 九 二 終 戦
	（注）生存者は終戦後米軍の収容所に収容され爾後各個に復員する

<p>独立速射砲第二十三大隊（威第五二四三部隊）</p>	<p>年 月 日</p>	<p>昭和一九 八 一五 九 〇 七 日</p> <p>至自 至自 至自 二 二 二 〇 〇〇 九九九九</p> <p>九 八 八 一 二 二 二 〇 同 〇 九 二 一 一 三 二 二 一 五 四 〇 〇 〇 一</p>
<p>略 歴</p>	<p>略 歴</p>	<p>独立速射砲第二十三大隊編成完結（秋田） 門司港出帆 マニラ上陸 第八師団長の指揮に入る マニラ南方カンルバン附近の警備 リバ附近の警備 マニラ東方拠点イボ陣地の防禦戦斗に参加 終戦 （注）生存者は終戦後米軍の收容所に收容され爾後各個に復員する</p>

独立白砲第二十一大隊（威第一七六五六部隊）

年 月 日	略 歴
昭和一九二六 七 二六	独立白砲第二十一大隊編成完結（東部第七五部隊） 部隊長 大尉 飯村 信雄
七 三 一	横須賀出発
八 四	門司港出帆
八 二 二	マニラ上陸
九 上旬	第一四方面軍の隷下に入る
一一 上旬	マニラ南方カバナツアンに進駐同地附近に於て作戦準備に任じた
一一 中旬	大隊はレイテ島に転戦を命ぜらる
一一 七	第二中隊（宮崎隊）レイテ島オルモックに第一中隊（途中海没し新たに山田隊を編成）をサンインドロに派遣し第三五軍司令官の指揮に入らしめた 本部主力は情勢の悪化によりレイテ転進を中止し緊急補充要員を加えて大隊を編成す 米軍オルモック並にサンインドロに上陸 レイテ島転進の中隊は米軍を迎撃して奮戦したが陸・海・空よりする攻撃を受け、

	二〇	
	一 上旬	20・1 上旬全員玉砕した
	三 上旬	大隊主力はマニラ東方拠点アンチポロ附近に陣地を占領す
	五 下旬	以後米軍と交戦大隊長以下多数の損害を受く
	八 一五	各隊生存者は該陣地を脱出してマニラ東方拠点山中で自活自戦の態勢に移行す
	九 二	停戦
	終戦	(注) 生存者は終戦後米軍収容所に入り爾後各個に復員する

1510

0445

臨時砲兵第一中隊（威第三八九部隊）

年月日	略歴
昭和一九四四年四月二日	臨時砲兵第一中隊要員は北支派遣の野砲兵第三十二連隊の各大隊段列の要員にして一九年四月本隊南方転進時後発追及予定部隊として上海に残置せられたものなり
一九四四年七月二日	追及のため上海港出帆
一九四四年七月五日	台湾高雄港上陸
一九四四年八月三〇日	高雄港出帆
一九四四年八月三〇日	ルソン島北サンフェルナンド上陸
一九四四年八月三十一日	爾後状況悪化のため遂に本隊に追及し得ずマニラ防衛司令官の隷下に配属せらる
一九四四年九月一日	臨時砲兵第一中隊編成完結（マニラ）
一九四四年九月一日	コレヒドール島に派遣せられ同島の防衛に任ず
一九四四年九月三日	米軍機の初空襲あり以来連日空襲を受く
一九四四年九月六日	米軍同島に上陸
一九四四年九月九日	部隊は玉砕するに至る
一九四四年八月十五日	停戦
一九四四年九月二日	終戦

（注）少数の生存者は終戦後米軍の収容所に入ると同時に解体せられ爾後各個に復す

臨時砲兵第三中隊

年月日	略歴
昭和一九一〇 一 二 一 〇	臨時砲兵第三中隊編成完結（タヤバス州サツパロック） 川北砲兵大隊に配属されバタンガス州モーバン附近の警備に任ず
一 二 中 旬	転進を命ぜられ一二月下旬バンギールに到着
一 二 下 旬	主力は第一〇五師団砲兵隊長の指揮に入り北部ルソンに向い行動を開始す 第二小隊をバギールに残置
二 〇 五 上 旬	バカハックに到着同地の警備に任ず
六 上 旬	優勢な米軍の攻撃を受け火砲は全部破壊され死傷続出の損害を蒙る
六 下 旬	ヌエバピスカヤ州キアンガン南側山地に後退以後同地を拠点として斬込作戦を続行す バンギール残置の小隊は20・1・10リザール州アンチポロに於て野口兵団長の指揮に入り同地に陣地を構築20・2・18米軍の攻撃を受け20・2・26ボンボンに後退徒歩兵となつて戦いを続行した 20・4・下旬ボンボンより更に東方二軒の山地に撤退して抗戦したが20・6・30隊長以下玉砕

昭和二〇

九 八 一 五
二

終 停
戦 戦

(注) 少数の生存者は終戦後米軍の収容所に収容され爾後各個に復員する